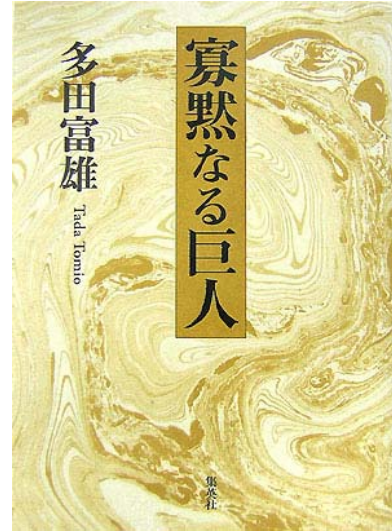


第七回 小林秀雄賞 受賞作品  
「寡黙なる巨人」 多田富雄 著 集英社



書 評

■ 大江 健三郎氏（2007年8月21日 朝日新聞）



...それに続く週、私はやはり「大きな人」というほかない人が、苦難を乗り越えながら「希望」を伝える声を聞く読書をしました。多田富雄さんの『寡黙なる巨人』です。

この世界的な免疫学者を、私が多田さんと呼ぶのは、自分もまた、この人と共に、そして小田実、井上ひさしと共に（この本から要約してゆきますが）、「戦後初めての少年たち」であったこと、「屈折はしていたが、初めて自由を手にした者であったこと」、「私たちの原点であったと同時に、戦後日本の原

点でもあった」日々に、この国の様ざまな地方で、将来に向けて自由な選択をし、それを展開し、実現しようとしてきたことを考えるからです。

多田さんは真実「大きな人」ですが、その自分を人間らしい悲痛なユーモアもこめて、こう定義されます。

「『巨人』は、相変わらず動作は鈍いし、歩くこともできない。原稿を書くのも人の十倍の時間がかかる。まだ声は数音節しか続かないし、発音は不明瞭だ。日常生活では相変わらず口数の少ない『寡黙なる巨人』に過ぎない。でも私は彼を信じている。重度の障害を持ち、声も発せず、社会の中では最弱者となったおかげで、私は強い発言力を持つ『巨人』になったのだ。言葉はしゃべれないが、皮肉にも言葉の力を使って生きるのだ。」

多田さんがその「言葉の力」によって「リハビリテーション診療報酬改定を考える会」を始動させ大きい署名を集め（名にしおう厚生労働省を相手に）、一進一退ながら不屈の闘いをされている。

それは戦後レジームの一面です。

## ■ 養老 孟司氏（2007年9月2日 毎日新聞）



一昔前、東大医学部に勤めていたことがある。著者は当時同じ建物で働く同僚で、ときどきことばを交わす仲だった。私より三歳年長だが、私にははるかに大人に思えた。まだこれからなにかするのだと私は漠然と思っていたが、著者は世界的な免疫研究者としての地位を確立していた。余計なお世話だが、ときどき思った。これだけの研究者を、大学は正当に遇しているのか、と。

だから退官されたときは、他人事ながらすなおに嬉しかった。著者がこういうところには勿体ない。以前からそう感じていたからである。これで余計なストレスも減るに違いない。好きなお能の世界に羽ばたくこともできる。著者の鼓は、高校時代以来なのである。実際に新作能を書かれたりしていたが、拝見する機会を得なかった。

ところがその著者が脳梗塞に襲われる。本書はそれからの著者の世界を描く。

脳梗塞で倒れ、意識が戻るまでに、著者は死の世界を夢見る。無限に寂しく、荒涼かつ不気味な世界を、著者はかいま見てしまう。これほど短く、みごとな死の象徴的な描写を私は知らない。お読みくださいというしかない。著者には詩人の血統があり、本書にも一篇の詩を載せる。

病の結果、著者は話すことばを奪われる。失語症ではない。球麻痺による構音障害と専門家が呼ぶ状況である。ことばを話す運動自体ができない、つまり声が上手に出せない。ただし、ことばがわからないわけでも、作れないわけでもない。さらに水を飲んだり、食べ物を飲み込んだりするものも不自由である。すぐにむせてしまう。右半身の麻痺もある。書いてしまえばただの患者の症状だが、筆舌に尽くせぬ苦しみだと著者は繰り返す。「寡黙なる

巨人」とは、じつはこの病の過程を通して、新たに生まれてきた著者自身のことである。巨人というのが本当にいたら、こういうふうにごちない動きしかできないものであろうな。著者一流のユーモアと皮肉が底に響いている。

それなら苦痛を訴えた本かというなら、とんでもない。そういう状況に置かれた人がどのように積極的に生きていくか、それを語る。

「私には、麻痺が起こってからわかったことがあった。自分では気づいていなかったが、脳梗塞の発作のずっと前から、私には衰弱の兆候があったのだ。自分では健康だと信じていたが、本当はそうではなかった。安易な生活に慣れ、単に習慣的に過ごしていたに過ぎなかったのではないか。何よりも生きているという実感があつたのだろうか。元気だというだけで、生命そのものは衰弱していた。毎日の予定に忙殺され、そんなことは忘れていただけだ。発作はその延長線上にあった」

「まだ一人で立っていることさえままならないが、目に見えない何かが体に充ちてきている。目に見える障害の改善は望めない。でも、何かが確実に回復していると感じる。どうもそれは、長年失っていた生命感、生きている実感らしい」

最近になって「リハビリテーション診療報酬改定」があり、著者はその反対運動に立ち上がる。不自由な身を押して社会的に行動する。むろん厚生省はそうした声を聞かない。その裏には、病人なんか訓練しても社会的・経済的には意味がないという本音があろう。金がかかるだけ。介護保険に丸投げしてしまえばいい。リハビリが必要な病人なんか、小さな政府、国が抱え込んではいられない。

病は中立である。貴賤(きせん)優劣を問わず人を襲う。優れた病人もいれば、そうでない病人もあろう。それは健常者も同じことである。その違いを見ず、病人という括りを作り、それを切る思想がなにを生み出すことやら。

ことばが話せず、ほとんど歩けもしない患者が生きている強い実感を持ち、生きている実感なんて、思ったこともないであろう人々が法や規則を作り、世間の状況を左右する。子どもは減り、自殺者は減らず、現職の大臣すら自死する。こんな奇妙な時代が、はたして史上にあったのだろうか。